

サルビアねっと その2



済生会横浜市
東部病院 院長
みすみ たかひこ
三角 隆彦 先生

2021年5・6月号で、鶴見区で2019年に始まった「サルビアねっと」について解説しました。今回、その後の進捗状況を報告する機会を頂き、その2”というタイトルでお話しさせていただきます。

「サルビアねっと」とは、個人の医療と介護の情報をクラウド上に集め共有し活用していく仕組みです。高齢者が増加する中で、医療や介護に全く無関係でいられる人は稀になりました。医療は患者さんの病気を治療し、介護は日常生活の困難に対して、より質の高い生活を目指します。医療機関同士あるいは介護施設間では、主に紙媒体での情報共有の仕組みはこれまでもありました。一方、医療と介護は深い関連があるにもかかわらず、発展してきた制度の違いにより分断されて扱われてきましたが、この2つは本来、連続的で密接な関係にあります。必要に応じて病院に入院し、退院後には住み慣れた家で在宅医療を受ける患者さん、介護施設に入居する患者さん等、療養形態は様々な場面が考えられます。そういった中で患者さんご自身が一番安心できることは、自分のこと（病状や経過）を知った上で、それぞれの場所に迎えられ、療養できることだと思います。

病院から在宅医療・介護施設へスムーズな橋渡しを行うためには、両者間での確かな情報の伝達が必要です。これまで、かかりつけ医や介護支援専門員（ケアマネージャー）から、ヘルパーへと情報は伝達されてきましたが、不十分なこともありました。

2019年度から、横浜市ではICTを用いた医療介護連携「サルビアねっと」がスタートしました。患者さんがどのような病気で入院し、どのような治療を受けたのか、どんな薬を飲んでいるかなどの情報や検査結果と、食事や居住、生活などの介護情報を一括してクラウド上にデジタルデータとして保存し共有する仕組みです。開始当初は、鶴見区の医療施設と介護施設の59施設が参加していましたが、今では神奈川区や港北区へ広がり、2021年末で、施設登録数は113施設、住民登録数は13,201人になりました。この間、使い勝手を良くし、スマートフォンからも住民登録ができるようになりました。神奈川県が進めている「マイME-BYOカルテ」というPHR（お薬手帳や健診データなどの個人医療情報管理アプリ）との連携や、データを匿名化して集積・分析し疾患の予防に活用する試みも始まりました。個人情報を取り扱うため、利用するためには施設、住民ともに登録が必要です。今後、より多くの市民に登録していただき、この仕組みを利用していきたいと思います。

